舟橋尚哉著

『初期唯識思想の研究』

―その成立過程をめぐって―

高崎正芳

本書は舟橋尚哉氏（現大谷大学専任講師）が、これまでに研究をし論述をされた、大谷大学『修士論文』真宗大谷派『擬講論文』及び『中辺分別論』や『入楞伽経』をめぐる各の諸論文等に、今回なにほどかの加筆その他をほどこして一本にまとめられたものである。そう云う本書には『初期唯識思想の研究』とするタイトルと『その成立過程をめぐって』とするサブタイトルがあたえられている。その中「初期唯識」と云う用語についてであるが、それはこの場合、たとえば唯識の全体的な、思想体系や歴史的時代区分の考究を目的の主体としての、初期中期後期とか第何期第何期とか云うような、そう云う区分を特に対象とした意味での言葉ではないようである。と云うのはここでの「初期唯識」とされている意味は、弥勒・無著・世親の唯識思想が「どのように成立したかを検討してみたかった」と云う著者（序文）の関心のあるところに基準をおいた言葉。つまり弥勒・無著・世親の説いた唯識の用語及びその頃の唯識説などを対象とした、と云うような意味での言葉と見られるわけである。それゆえに「初期唯識」としたい方に、今の場合特に多面的な意味あいを想起する必要はない。

著者の云う初期唯識思想に関しては、その各の問題の思想的背景を、側面的にあるいは主体的に関連のある佛典に求め、唯識思想の形成過程における各問題の、同と不同がいかにあるかを考察しながら、主な唯識思想の解明に及ぶ場合が多い。そう云うことが、本書におけるサブタイトルの意味するところとなっているもののようである。また唯識の諸問題に対する著者の関心は、引続き更に広められていると聞いている。

◎本書の記述内容の大綱を知る上に必要な、各部各章の項目を記してみる。

第一部　阿頼耶識思想の成立とその展開

第一章　原始佛教における阿頼耶

第二章　阿毘達磨における阿頼耶

第三章　大乗における阿頼耶識

第四章　八識説の成立について

第二部　唯識三性説の形成

第一章　空と三性

第二章　三性説の成立

第三部　大乗における無我説の研究

第一章　釈尊における無我説

第二章　阿毘達磨時代の無我説

第三章　大乗における無我説

第四章　『成実論』の無我説とその思想史的位置

第四部　『中辺分別論』の諸問題
　第一章　『中辺分別論』の諸問題
　第二章　『中辺分別論』における業の問題
　第三章　『中辺分別論』（障品）の和訳
附、世親と『入楞伽経』との先後について
上記の他、更に各章が多くの節に分かれて記述されている。なお本書の各論述のあとには漢・邦、梵・巴・欧各語の索引も附してある。

◎次に右の記述内容にしたがって、所説の大要を簡約して述べてみる。

第一部では、阿頼耶識が成立する上で注意される阿頼耶の語ならびに思想、あるいは阿頼耶識の成立にともなう阿陀那識と末那識との関係、そして末那識の成立をめぐる問題及び八識思想の成立時期等の考究が行なわれている。

著者によると、ālaya, ā√lī（阿頼耶）は、原始佛教佛典において「執著」「愛著」の意で用いられている場合が多く、時として「在処」「避難の処」などの意にも用いられていること、および非常に稀な例の「樔窟」と云う訳語のあることなどについて論じている。

「樔窟」は姚秦、佛陀耶舎共竺佛念等訳の『四分律』の用語であるが、対応するパーリ『律大品』との対比から「樔窟」がālayaにあたることを知り得るわけである。漢字の樔窟には、こもるあな、巣穴と云うような字義があり、そう云う意味からすると漢訳者は、原語の“ālaya”を、執著の在処の意にとっていることがわかる。一方『五分律』では大体が簡潔な訳となっているために、『四分律』に見られるような訳語のニュアンスはよく示されていない。

原始佛典における阿頼耶の考察に続いて、阿毘達磨を主にした阿頼耶をめぐる論述がなされている。そこでは、部派佛教が説いた教義、たとえば「寿」とか「窮生死蘊」とか「細心」その他が、阿頼耶識の先駆思想と考えられることを説いている。そして阿毘達磨佛教佛典の阿頼耶の用例にも検討を加えているのであるが、それ等は原始佛典的な用語用法を取るものがほとんどである。ただ『大毘婆沙論』巻第百四十五の「阿頼耶所蔵」の文句は、阿頼耶識の成立を考察する過程で注意されることを論じている。そして心意識に関するごく簡単な記述もある。

大乗における阿頼耶識については、『解深密経』の考察に始まり、『瑜伽師地論』『中辺分別論』『大乗荘厳経論』『摂大乗論』。『唯識三十頌』および『入楞伽経』と云う諸佛典にわたる各の論述がある。そこでは「阿頼耶」「阿頼耶識」の用語とその意味用法をめぐって、各の経論における所説の過程を追究している。とくに古来「阿頼耶の三義」と云われた能蔵・所蔵・執蔵の説明は興味深い。『摂大乗論』が阿頼耶識を果の体、因の体、自我自体との関係で説く頃には、大乗の阿頼耶識思想もその体系上の定着を見せてくることになる。『唯識三十頌』になると阿頼耶識はもち論、末那識の所説も明確になってくる。そして唯識論の組織的な思想教理が相互に大成へと導かれて行くわけである。本書はそれらのポイントをとらえながら、他方

で阿頼耶識思想が「如来蔵」や「清浄識」と密着して説かれている点をも『入楞伽経』『大乗義章』によって考察している。

右記のような内容記述に続いて、八識説の成立に関する考究がある。末那識、八識思想、八識説をめぐっては、昭和初期に宇井伯寿博士と結城令聞博士との間で論議が行なわれた。その後今日までの間に唯識部門の新しいサンスクリットテキストや内外諸学者の研究等が発表され、また研究方法の分野も梵・巴・漢・蔵などにわたって広められ深められる方向に進んで来た。この時点において本書の著者は八識説の成立問題をとらえて検討し、その結果独自の見解を示すに到っている。それによれば『唯識三十頌』の“mano nāma vijñānam”の語をもって、末那識の完成したとはいわないまでも、末那識の明確な認識を得ることの根拠としているようである。この立場は、八識説の成立を世親以後におこうとする宇井説。八識思想の(末那識の)成立を弥勒の論書以前に見ようとする結城説。その二説とは自ずから観点を異にした結論を表明することになっている。なお同じような立場で「八識」あるいは「八つの識」と云う明確な言葉を基本とした概念が、『入楞伽経』において認められることも著者は表明しているのである。以上のようなことがらが第一部で説かれている。

◎次に第二部についてであるが、そこでは唯識三性説の形成を、空と三性、三性説の成立にわけて考察をしている。前者は龍樹によって基礎づけられた空の教学が、どのようにして唯識教学の三性説へ展開して行ったかを論じたものである。その所論の中では、山口益博士に送られて来たヨハネス・ラーデル博士の書面に於て、ラーデル博士が述べた『成実論』に三性説の源流の一面が見出されるのではないかという、そういうようなことにヒントを得て、『成実論』の「仮名心・法心・空心」あるいは「真」について説き進めた記述がある。加えて『解深密経』の三性、三無性説にも言及している。三性説の成立を述べるところでは、虚妄分別、五法と三性、三性の成立及びその構造、蛇縄麻の譬え等にわたる内容記述がある。その中、五法と三性の考察で、五法は三性説成立以後に説かれたとしていること、それを受けた三性説の成立の考察では、『成実論』の説く「仮」「実」「真」「人無我」「法無我」が、三性説の原形につながるであろうことを述べている。内容が前節の「空と三性」の所論と重複しているところもあるが、ともかくそこで、三性の原形『成実論』、三性『解深密経』、五法『入楞伽経』という順序で述べられている。

◎第三部では、釈尊の説かれた無我の教えが佛教伝承展開の過程において、どのように理解され、くみ立てられて行ったかを、原始佛教の無我・部派佛教の無我、および大乗佛教の無我について考察している。原始佛教の無我については、本書は釈尊における無我と云うことで、『スッタニパータ』の記述を中心にし、時として『雑阿含』の記述なども用いて、我、我執、名色、五蘊などの考究をしている。この部分は舟橋一哉博士の『原始佛教思想の研究』第一 佛陀の根本思想の所論を合せ読むことも有意義である。部派佛教については、『頭宗論』や『倶舎論』

の説いている人無我法有思想を論述している。大乗に関しては先づ中観派の無我説を述べている。その特色は法無我無自性空と人無我の説といわれている。そのあとに唯識派の無我説について述べている。もち論、唯識派もまた人無我法無我を説く無我説であるが、それにはたとえば煩悩障の滅が人無我に、所知障の滅が法無我にと云うような、唯識教理の特色が加味されていることを注意している。更に『成実論』の無我思想、無我観をめぐる論究がなされている。『成実論』は一体、小乗系の論なのか大乗系の論なのかと云うような問題が、時々研究者間にもちあがって来るようであるが、そのことは『成実論』が空観（人空）無我観（法空）を説いているのにもかかわらず、その空が析空観を採用している点に問題の原因があるといえる。本書もこの面に観察の対象を求め、いくつかの考究を行なっている。その中の注目される論述で『成実論』の空観、無我観（二無我）の解釈と『荘厳経論』求法品、安慧釈の空無我の解釈とが類同していること。および求法品、安慧釈では、五蘊の空無我が人無我の行相修習のところで説かれていると共に、法無我の行相修習のところでは、菩薩の勝解行地における法無我の修習を説いていると云うのがある。それによって『成実論』の二無我観と、『荘厳経論』安慧釈の二無我の所説との各の次元にわれわれは注意せしめられるものがある。そしてその他の考察をも重ねた結果、本書の著者はこの問題について『成実論』は空観無我観を説きはするが、大乗の人法二無我とはいいきれないとしているのである。とはいえ『成実論』には『四百論』の引用が見られたり、『中論』の論述法が用いられたりする場合もあって、当然それらの影響も考えられる。そういうことからみて著者はまた『成実論』を、空思想に関連をもつ点の多い経量部系の論書であると述べている。そして著者は経量部が初期唯識思想の形成に影響をもつものと云う観点から、初期唯識思想の成立を論ずるに当って、『成実論』の検討が重要であることを強調している。なお『成実論』の思想史的位置に関する所論中の、『大毘婆沙論』や『舎利弗阿毘曇論』の空の説は、『般若経』典類にも同じような所説がある。それはいわゆる般若空の記述であるが、その『般若経』典や、『大智度論』更には『十八空論』に及ぶ考究もまた一考してよいことであろう。なお本書では『成実論』の三世と蘊処界との所論もある。

◎第四部は『中辺分別論』に関する著者の最近の研究をまとめたものである。『中辺分別論釈疏』については、知られるように山口益博士の諸業績がある。近年になって『中辺分別論』のバーシャの梵本マヌスクリプトが見出され、そのマヌスクリプトの写真を用いて研究校訂されたサンスクリット本が、長尾雅人博士や Dr. N. Tatia によって出版された。そしてシャーストラも Mr. R. C. Pandeya によって出版されている（一部還元のテキスト）。本書著者の研究はそれらの資料を用いて『中辺分別論』相品・障品・真実品・対治修習品・無上乗品の各にわたる思想と、その思想が他の唯識論書と、どのような関連・相異をもつかを論じている。もち論漢訳、チベット訳を駆使しての考究であることは云う迄もない。それらの研究のまとめで、

著者は、『中辺分別論』真実品第十三偈の偈文と『入楞伽経』中の偈文とが類同すること、及び『中辺分別論』真実品に『解深密経』の一文が引用されていること等を注意しなければならないと述べている。続いて『中辺分別論』の業の問題をめぐる著者最近の所論も記述されている。更に第四部のおわりには、『中辺分別論』障品（世親釈、梵文バーシャ）の全和訳が収録されている。そしてそれには、上欄に長尾本の頁数、下欄にTatia本の頁数を附し、北京版チベット訳の頁数も本文中に記してあって、和訳と各テキストとの照合の上で大変便利なものとなっている。

◎次に附論として、世親と『入楞伽経』との時期的な問題の考察が行なわれている。先づ世親の『釈軌論』（山口益博士『世親の釈軌論』日本佛教学会年報第二五号）において、『入楞伽経』の偈文が九偈引用されている（山口益博士『大乗非佛説論に対する世親の論破』東方学創立十五周年記念、「東方学論集」）ことに、問題考察上の一つのポイントがおかれている。従来『入楞伽経』は世親以後の経典とされていた（たとえば宇井伯寿博士『印度哲学史』で云う、大乗佛教経典の第三期（第二期が弥勒・無著・世親の基づくもの、若しくはその時代に存したもの）。しかしながら『釈軌論』中に『入楞伽経』の偈があることと、更にまた近時、その中の三偈は『入楞伽経』無常品の偈であって、それは漢訳の四巻『楞伽経』、七巻、十巻の各にも類同する偈が存在することとの関連を、あらたに本書の著者がみきわめるに到った。それらのことによって著者は、「世親は『入楞伽経』を知っていたのではないかと思われる」と云っている。そのような考察によって『入楞伽経』を世親以前の成立におく場合の、世親の年代設定についてと、世親と徳慧の年代関係についての論述がなされている。ところで『入楞伽経』（古い経）が世親以前の成立とするならば、四巻『楞伽経』や梵本に八識の建立が記されており、それについては本書の著者も第一部・第四章第四節で述べているが、そのことは、世親の著述や世親の唯識説とどういうことになるのか、いささか疑問も残る。しかしながらそうした問題点やまたその他の点についての論究は、本書の著者による今後の研究に期待できるものと思う。

◎多くの基本的な佛典文献や新らしい佛典文献資料を用い、唯識思想に関する大切なことがらに取り組み、その成果を収録している本書は、唯識研究上、大いに有用であり必読されるべきものである。――きめられた紙数が一杯になったので私の所論に不十分なところはあるが、この一文を終ることにする。――

（S五十一・九・一〇）

（昭和五十一年三月、国書刊行会、A5版四〇八頁、四、五〇〇円）